

コスモス日和

五八

小石

低い門柱、の上に伸びた薔薇のアーチをくぐる

と二百坪に近い庭の中央に、五十坪程の三角形の芝生、まわりには美事に枝の繁つたコスモスが今花ざかり、傍の畠には小松菜、ほうれん草、つややかな紫の實をつけた茄子が地味の豊かさを語つてゐる。門の右手の雑木叢には、小鳥のさへづりが、はつきりと、澄んだ朝の梢をわたつてゐる。

「先生、おはよう」

「おはよう、まあ三郎さん早いこと、ひろ子は今起きたばかりよ。」

「僕、一等だ、お父様と一所に出かけたの」「あ、あの電車にお父様のついでいらつしやるかもしれない、先生、あれ東京行きてしよ、むかふへ行

く音がする。」

三郎さんは、急に園舎にかけこんで、窓から首を出し、

「お父様が、幼稚園の電車みえるといゝんだがなア、あ、もう行ちやつた」と獨言てゐる。序にこの園舎の形を説明すると、長さ五間、幅二間で室は、ピアノのある所三坪と遊ぶ室九坪とで、兩室の境は丁度電車の、運轉臺と乗客の席のある所との様な具合で、椅子や机は、はめ板から持ち出せるようになつてゐる。外觀は。ポールと車輪が無いだけで、屋根といひ、窓といひ、完全に、省線電車そのまゝあざやかな横の赤線の所には、汽車の等級、電車の方向の様に、白色で「幼稚園」

と記してある。實際巴幼稚園といふより、電車の幼稚園と云た方が近所の人達にはよく解る位である。「先生」は園長兼保母で、四歳になる、ひろ子ちゃんとMさん(女中)と三人、この電車型保育室に附屬した保母住宅に、あけくれを過して、他の十三名の園児に家庭的な親身の教育をして居られる。三郎さんと他三、四人は、塵をしいて垣根のそばで、一心に朝顔の種子を取てゐる。其の内Y子さん、Sちゃんと追々集つた頃、割烹着で、きりつと身ごしらへをした、先生は、何やら新聞紙包と美しい花の繪を持って來られた、新聞紙の中からは丸々と肥た球根が出た。

「先生、これチウリツプでせう、お家のお兄様も昨日おうえになつたのよ」

元氣のいゝ男の子達は、もう手に／＼シャベルを持って來て、

「どこへ植えるの、此處？」

「コスモスとコスモスの間にしませう、一寸此處へいらつしやいな、こうして突つた方を上にひけて、そつと土をかけないと、大事なお花が中から出られなくなつてしまひますよ」

「先生、見て頂戴、これでいゝの？」

「僕のはもう少し、芽が出た處」

「それぢやあ、白(犬)がふみそうだから、も少し土をかけて置きませう」

球根が植ゑられて、おかたづけ、がすみ、しばらく、素足で徒競走や躍びつこが、すんだ後、一同は塵の上で、ミルクとカルケツトのおやつをいたゞいた。やがて、いなごを獲りに行く相談が出来た。袋作りがはじまつた、大小とり／＼に出來た、袋を持て一同は、おばさんと近くの田に行く。弓形の天空、かゞやかしい秋の陽光、どこかの梢に、百鳥がないてゐる、黄の濃淡で彩られた田面、ひろ／＼と目も遙かにつゞく。ゆた

かな、武蔵野の景色！峠道を追はれるのが、いなかか、追ふのがそれか、鋭い鐘の響も、耳に迫る集團のざわめきもなす。

手に／＼獲物をさげて一同が歸て來た時、晝食の用意が出来てゐた——といふのは昨日皆で取た畑の小松菜をMさん(女中)が、おしたしに作て下さつたのである——テーブルをかこんで楽しいお辨當、自分達で種を蒔き自分達で水をやり、とり入れた野菜、味覺の問題ではなく、美味しいらしい、子等の頬はりんごの様だ。食後一同は棟つききの、先生のお室に行て、二十分前後のお午睡をする、押入があり、箆笥がある、疊のお室、それはどんなにか子供達に、アットホームな感じをさせるのかお母様のお室で、あまへるような心持になるらしい、それに存分な午前の運動は、あまり無理でなく子供を夢の國に誘ふらしい。

「よくお静かにお午睡が出来ますね、林間學校な

どで、試みても、大方は睡れないで、身體だけ横にして、仕方なしに本を讀んだりしてゐるさうですが」

といふ問ひに對して、先生は、

「はじめは、私もどうかと案じましたが、澤山運動して、たつぷり食事をとれば生理上からも自然に、また小人數といふ事が幸してか、あまり無理を感じませんでした、雨の日など運動の少し足りない時は、お嘶でも讀みますと、喜んで聞きながら何時か睡てしまひます。」

と、午睡のあとの子等の元氣は又一入で、滑臺にブランコに芝生の上のお角力に、畑のいんぎんとつたり、胡瓜をもちで後前を切り、ほんとうのお漬物をしたりする、勿論先生が一所にされるのだが、それが翌日のお晝のテーブルに乘たりするさうである。主義主張のみでない、生活即教育の實際が此處に見られる。教室の講義でもなく、春

の野の夢でもなく、机上の空想でもない。實際の幼稚園である。

「今何々の時間だから、どうしても何々をせよ」てはないのである、描き度い氣持になつた時、紙を要求してクレイヨンを持つ、その手はほとばしるような線を描く。

二時になると、おかたづけやお歸りのお仕度がはじまる、

「先生さようなら」

大方は近所のお家なので、一度歸宅してまたおき芝生へ、滑り臺へ、遊びに来て、日の傾くまで遊ぶこともあるさうだ。

「産みの苦しみ」とは字に書くやうな容易な事ではない、どんな些少の事にも大きな言葉に出来ない、大きな努力が盡される。まして永計畫の第一歩にある、巴幼稚園は今、經營に於て創設の苦闘時代である、それだけ保育に於て、生命と、

眞實に充ちてゐる、それをひろい豊かな自然が圍んでゐる。恵まれた子等のこの朝夕!! (十月十日 武藏吉祥寺に巴幼稚園を訪ひて)

灰の如き記憶たゞあり年暮るゝ

虚子

大年の我顔惜む鏡かな

句佛